

送 別 の 辞

文学部教授 日 下 隆 平

英語英米文学科の教員の一人としまして、同僚である中村祥子先生への送別の辞を一言述べさせていただきます。このたび思いもよらず、突然の辞職願を知り、同じ時期に大学に在任した者として驚くとともに、まことに残念でなりません。あまりの潔さに敬服する一方で、何とか翻意を促せないものかというのが、その時の偽らざる気持ちでした。これはおそらく英語英米文学科教員全員に共通する思いでありましょう。

思い起こせば、中村先生が本学にお勤めになったとき、岡田章子先生と小生の3名が英語教員として採用されました。現在の「原則不補充」という文学部の人事計画を思うとずいぶん潤沢な採用をして戴いたものだと思ってしまう。当時、中村先生は社会学部、私は経済学部配属されましたが、教授会自体も全学部合同で行っていたことと、一般教育に関する案件については実質上、一般教育懇談会という別組織が中心となって取り決めていた関係から、教員の所属学部の違いはあまり気にはならない時代でした。違いといえば、せいぜい連合教授会で座る場所が異なることぐらいの認識であったように思えます。また当時の一般教育懇談会のなかには、今は少なくなりましたがユニークな先生方が多かったような気がします。狭山キャンパスで我々の研究室はともに最上階の4階にあるうえに、エアコンはなく、夏には容赦なく照りつける暑さに苦しめられたものです。大学は経済学部、経営学部、社会学部の三学部だけでこじんまりとしていましたが、それらの学部の性格のためか、女子の4年生大学進学者が今ほどではなかったためか、女子学生は極端に少なく今のような華やかなキャンパスの彩りを思うとまさに隔世の感があります。中村先生とは多くの仕事を一緒にさせていただきましたが、

様々なことが思い起こされます。その中でも勤め始めた頃は入学試験の採点方法もマークシートでなく手作業であったため、早朝から夜まで休む暇もありませんでした。昨今のように入試回数が増えたものの試験監督が終わると任務をすぐに解かれるのと較べると、入試の採点業務はかなり負担の多い作業と言えます。このような採点業務のなかで記憶に残るのは、先生の仕事ぶりがいつも迅速かつ正確であったことです。さらにマークシート試験に移行してからは、問題作成の苦労などをともに味わいました。いろいろ議論を交えながら問題作りをしたのも今となっては懐かしい思い出です。どんな仕事であれ、委ねられた仕事に対する先生の真摯な態度には、まさに頭の下がるものがありました。また教授会を始めとする様々な会議では決して発言を頻繁にされたわけではありませんが、重要な事項に関する先生の発言には正鵠を射たところがあり、我々が示唆を与えられたことも少なからずあったと記憶しています。先生の本学での足跡は、まさしく桃山学院大学が辿った道程であり、本学がキャンパス移転を経て文科系の総合大学へと拡充してゆく時期と重なっています。その意味で、先生が本学発展の過程で寄与された役割、とくに文学部が設置されてから、先生が文学部・研究科に果たされた貢献度は多大なものがありました。授業では、英語に加えて、イギリス文学関連科目を中心に講義、ゼミなどで教授してこられました。近年はイギリス文学史を担当されるかたわら、大学院の学生の修士論文の指導に熱心に取り組んでこられました。ご専攻であるビクトリア朝時代の小説の分野では、単著『E. ギヤスケルの長編小説』をはじめ、数多くの研究論文を内外で発表されてきましたが、この『英米評論』にもその多くを発表されてきました。それにしても俗人の思いでしょうが、先生が他大学への転出ならまだしも、かくも早く教壇を去る決意をされたことは、何とも惜しまれてなりません。しかし大学から離れられても、真摯なお人柄からして、研究面では今後ますます大きな成果あげられることでしょう。結びに変えて、ご健康と先生の新たな幸ある出立を心からお祈りする次第です。Bon voyage!

(2004. 12. 1)